

読者ふれあいページ

「こちら虹」は楽しかったこと、感動ことをつづってください。「お助け倶楽るアイデアやお知恵をお寄せください。電話番号を明記ください。

有為の奥山 今日越えて

出雲市斐川町・仁照寺住職

江角 弘道

早いもので、もう母の十三回忌法要をすることになりました。生きていれば、100歳になります。母の名は、無為子といいます。子供のころ、この名の意味がわかりませんでした。友達から「為になら無い子」と読まれて、変な名だとわかられたことがありました。後に仏教を学んでみると「無為」とは、生滅変化しない永遠絶対的真理を意味し、いろは歌の「有為の奥山 けふ越えて」とある「有為(無常なるもの)」に対するものであることがわかりました。

混迷・生きる

教えの庭から

の信者様もいたらしく、毎回法話の内容も変えていたなどと、母は自分の父親の活動の様子を、深い尊敬をこめて私に話してくれました。肖像写真も大切に保管していました。また、短歌



挿絵 MASAKI

を詠んでいましたので、「無為の名をつけてくれたに父ありがとう 名前にはずなき暮し求めん」という歌を作って、感謝の思いを表していました。

障が恶化し、孫娘の死後に、両目を完全に失明してしまいました。その頃には、次のような歌を詠んでいます。「見上げても今の桜は見えもせず 亡き夫と見たぞと思ひ出す」

「御仏の顔は見えずとも本堂へ 杖を頼りに迷わずに行く」
82歳になった時、自宅の座敷で転び骨折をしました。すぐに入院し、治療しましたが、ほとんど歩けなくなっていました。家族だけの介護も非常に厳しいものがあり、特別養護老人ホームにお世話になることにしました。亡くなる2カ月前くらいから認知症が進み、まともなことを話せなくなり、そして1カ月前くらいには、ほとんどものを食べなくなり、話し掛けても何も答えてくれなくなりました。人間、ものが食べられなくなったら、臨終に近いこととのサインのようです。これまで、現代の高齢化社会の問題である終末期医療に直面しました。胃に穴を開けて、栄養剤を注入する胃ろうの手術を受けて、命を永らえるべきか、それとも平穩で自然な死を願うか。医者と家族を含めて相談し、母の状態をしっかりと見極めて、自然な死の方を選択しました。

1999年12月26日に、以前から患っていた緑内